K-8　東松島市宮戸月浜地区　　2013年1月16日（水）

報告者名　大沼　知　　被調査者生年　①1972年（男）
調査者名　俵木　悟　　被調査者属性　①トラック運転手
補助調査者　大沼　知

被調査者（主な聞き書きは話者①から）

＊話者②　1972年（女）、話者①の妻

今年のえんずのわりを終えての親としての感想

無事に行事を子ども達がやり終えてホッとした気持ちであり、事故なども無くよかったという思いである。行事中はお母さん方が子ども達につきっきりで、朝早く子ども達を起こして岩屋に向かわせたり、お籠りの間もほとんどの時間を子ども達に付いて目を配っていたため、お母さん方の方が大変だったのではと気遣う。本当は子どもの行事であるが、地震がまだ続くこの状況で、何が起こるかわからないので、子どもがもう少し大きくなるまでは親が付いて見てあげなくてはと考えている。

行事の様子を見て、小学生が3人しかいない中での行事であることの大変さをわかってはいつつも、自身がえんずのわりをやっていた時と現在を比べて、大将が働いている（食器洗いや片づけといった雑用）ことに違和感を持っている。昔の「大将の言う事は絶対」、「大将は指示を出して年下を動かす」という雰囲気が段々無くなってきていると感じている。浜に出ての声出しも長い時間延々と出させられて、声が枯れるほどやらされたという。

今後行事を続けていく上で、やはり子どもの数が少ないというのが一番の懸念である。来年、再来年と1人ずつ新たに子どもが行事に参加することが見込めるが、今の所の計算だとそれも長くは続かないとの見方である。しかし当面は人数は確保でき、今行事を行っている3人も中学生になれば要領が掴めてやりやすくなるだろうとみている。行事の参加資格を年齢で縛るのではなく、地域の男の人達でサポートしながらやっていくということも、行事を続けていくためには必要ではないかと考えつつも、えんずのわりはやはり子どもの行事だから、大人の関わりが強くなっていくことには抵抗を感じている。

行事後の子ども達の様子から、6日間の疲れが見てとれるといい、それは肉体的な疲れというよりは、取材のカメラに精神的な疲れがあるのではと思っている。肉体的な疲れは自身が行ってきた時と比べればそれほど大変なものではないとしつつ、カメラをまわされると、どうしても自然体ではなく、意識して作ってしまうことからそれが疲れの要因の一つではないかと感じている。

震災後の仕事の様子

話者は震災後、宮戸小学校体育館で避難をしていたが、4月になると宮戸西部漁協の避難所に移り、それと同時にアルバイトを始めた。民宿のお客さんからの紹介で新利府駅の新幹線の線路補修のアルバイトから始まり、そこで何日か働いたあと、次は幼馴染の同級生の旦那さんからの紹介で石巻にいき、石巻港付近で決壊や地盤沈下、ガードレールの無いところといった危険な道路にトラロープをはったり、通行止め、立ち入り禁止といった標識を置いて危険な場所を封鎖する仕事をしていた。それを5月半ばくらいまで行っていて、その後、父親の後輩からの誘いで、野蒜の建築会社で働くようになった。誘った人物は父親の後輩かつ友達でもあるらしく、昔からの付き合いで、父親が以前、長く墓石屋で働いていたこともあり、その時からすでに関係があったという。その会社での仕事はダンプや重機を使うことであった。月浜仮設住宅では話者の父親が軽トラックを移動や瓦礫撤去の仕事などに使

うため、自身は軽トラックを使うことが出来なかったそうであるが、会社から仕事などで使う車を借りることができ、良くしてもらったという。そこでしばらく働きながら自身のダンプを購入した。

10 月になって、月浜での瓦礫撤去や運搬を請け負っていた矢本の土建会社の社長が、知り合いの父親であったことが判明し、社長が現場に来ていた時に、社長と知らず話していたらそのことがわかり、その伝手社員という形ではなく、個人事業主としてその会社で仕事をすることになった。矢本の土建会社での仕事は主に自身のダンプを使って瓦礫の撤去や運搬を行い、現在に至る。

話者は、震災前は仙台で板前の修業をしており、月浜に戻ってからは、海苔養殖と民宿をしていたのであるが、現在になってなぜすぐにダンプといった重機が使えるのかというと、自身が小学生の時に民宿が忙しいと、母親の兄の重機の会社に預けられていて、そこで一緒にトラックに乗ってトレーラーの上げ下げなどの仕事場に付いて行ってそこで手伝いなどをしているうちに自然と馴染んで覚えていったそうである。免許自体を取得したのは震災後のことで、直接現場に行って、オペレーターがいない時は自分で重機を動かさなければいけなく、大きな会社になるほど、免許を持っていないと事故など起きた時の責任問題となるので、現場での仕事を任せることができなく、自由に動けるように免許を取った。父親も一緒に免許を取り、昔から父親は重機を改造したりなど詳しかったので、人手が足りないときはその仕事をしたりしていた。

こういった重機関係の免許を持っていると現場で何かと重宝され、そこでまた関係性をつくり新たな仕事を請け負うということが多いという。震災後は友達や知り合いといった関係からいろいろな人から声を掛けてもらったといい、その中でも父親の知り合いという人が多く、父親の顔の広さが改めて認識できたという。

今後しばらくは重機を使った今の仕事を続けていき、月浜での漁業は父親が主にやりながら、一緒に漁業もやっていくという考えである。海苔養殖は自身が体調を崩してしまっているのと、設備投資などを考えると個人で再開するのは難しいと考えている。話者は現在、漁業関係の仕事はしていないが、漁協には正組合員として籍を残しており、今後は父親と一緒に定置網などをする予定である。